

平成30年度 家庭部会研究計画

1 研究主題

家庭生活を見つめ 学び合い 豊かな生活を創り出す子供の育成

2 研究主題設定の理由

今日、我が国はグローバル化や少子高齢社会の進展等、変化の激しい複雑な社会環境、多様な価値観の時代を迎えている。家族・家庭生活や消費生活の変化、持続可能な社会の構築等、生活の営みにかかわる課題が山積しており、社会の急激な変化に対応できる力が求められている。このような将来の変化を予測することが困難な時代こそ、一人一人が自立し、家族や地域の人々と共に支え合う生活を創造することが重要である。

こうした中で、家族の大切さに気付くこと、自らの健康を考えた栄養のバランスのとれた食事をする事、家庭生活についての理解を深めること、日本の生活文化の大切さに気付くこと、消費者として必要な正しい知識を身に付け環境に配慮した生活をする事等、家庭科教育が果たす役割は大きいと考える。

将来子供たちが自立し、よりよい家庭生活を営むためには、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせ、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、自らの家庭生活を見つめ、課題について意識をし、解決への意欲を高め、生活をよりよくしようと工夫することが重要である。また、課題解決の過程において、子供同士、家族や地域の人々等と関わり学び合いながら学習活動を行うことで、自分の成長を自覚し、家族や家庭生活を大切にしようとする心情を育むことができると考える。そこで、「家庭生活を見つめ」「学び合い」を積み重ねることにより社会の変化に対応できる「豊かな生活を創り出す」子供の育成を目指し、研究主題を「家庭生活を見つめ 学び合い 豊かな生活を創り出す子供の育成」と設定した。

3 研究主題について

(1) 「家庭生活を見つめ」「学び合い」とは

「家庭生活を見つめ」とは、子供たちが自分の家庭生活に関心をもち、衣食住等に関する様々な生活事象における課題に気付くことである。しかし、日常生活に特に不便や不十分さを感じることなく過ごしている子供たちが、自分のこととして課題を見付けることは容易ではない。身近な家庭生活を改めて見つめ直し、疑問や発見を大切にして、「なぜそれをするのか」「なぜそのような方法で行っているのか」等の課題解決への必要感をもたせながら課題を設定する。このことにより、学習意欲を高めたり、主体的に学習に取り組もうとする態度を育んだりすることにつながる。と考える。

「学び合い」とは、子供たちが自分の家庭生活の中から見付けた課題を、子供同士や身近な人々等、事柄と関わり合いながら、解決する力を身に付けることである。実践的・体験的な学習活動の中で、他の子供たちと考えを伝え合い交流することで、自分の考えを広げたり深めたりする。さらに家族や地域の人々と関わり合いながら課題を追究することで、家族や地域のよさ・人々の願いや知恵・物の大切さに気付くであろう。この新たな気付きや発見が、さらに高次の学びへと進み、家庭生活の様々な場面で活用できる確かな実践力を育てるにちがいない。

(2) 「豊かな生活を創り出す」とは

「豊かな生活」とは、子供たちが家族の一員として家庭生活を大切にしようとし、地域の人と共に生き、環境に配慮しようとする中で創り出される生活である。子供たちは、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、一連の問題解決的な学習過程を積み重ね、課題を解決する力を養うことにより、自ら課題を解決できた達成感や、実践する喜びを味わうことができると考える。こうして自分の成長を実感させることは、家族の一員としての自覚をもたせ、よりよい生活を営むために工夫する実践的な態度を育み、自分の成長を支えてくれた人への感謝の気持ちを育てることにつながると期待される。また、限りある物や資源を大切にし、環境に配慮した生活を工夫することが、将来安心して生活できる持続可能な社会を構築する基盤となる生活を創り出すであろう。これらのことを通して、豊かな家庭生活を創造していくための能力や心情が育まれ、やがてはそれが「生きる力」となっていくと考える。

4 研究内容

(1) 指導計画の工夫

① 2 学年間を見通した年間指導計画

2 学年間の学習の見通しをもたせ、子供や学校、地域の実態に応じて、家庭科で育みたい子供の姿を明確にする。基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けさせるために、どのように題材をつなぎ、積み上げていくか、学習内容の関連性や系統性を考えて段階的に題材配列を工夫する。

また、家庭や地域での実践についても、学校や地域の行事等との関連を考えたり、長期休業等を活用したりする等、計画的に位置付ける。

② 他教科等との関連、中学校の各内容との接続を明確にした指導計画の作成

家庭科と他教科等との関連を明確にするとともに、中学校の技術・家庭科家庭分野の内容を見据え、系統的に指導できるよう、題材配列や題材構成を工夫する。これにより、子供たちがこれまでに学習してきた内容と中学校の各内容との接続が明らかになり、子供の理解の程度や思考の流れを予測する等、見通しをもって指導計画を考えることができる。

③ 「家庭生活を見つめ」「学び合い」ができる題材構想

子供が学びの意欲を持続させ、さらに次の学習への関心を高めるために、「家庭生活を見つめ」「学び合い」ができる手立てを題材構想の中で積み重ねていく。より実生活と結び付いた実践的・体験的な学習活動の中で「学び合い」を一層充実させる。学んだ知識や技能を活用する家庭や地域での実践も、一連の学習過程として位置付けるようにする。また、「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点を適切に定め、見通しをもって指導できるよう題材構想する。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

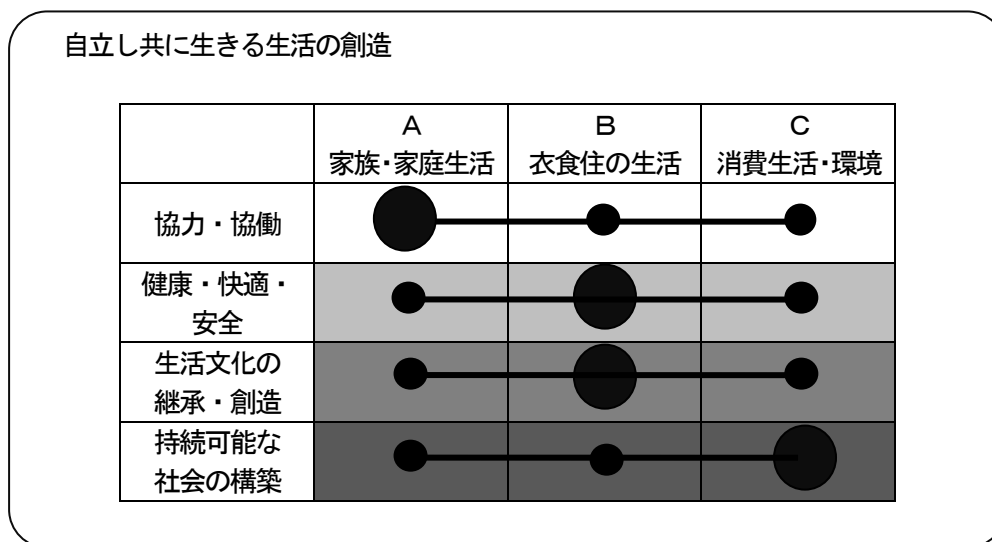
「主体的な学び」とは、題材を通して見通しをもち、日常生活の課題の発見や解決に取り組んだり、実践を振り返って新たな課題を見付け、主体的に取り組んだりする態度を育む学びである。

「対話的な学び」とは、子供同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたり、家族や身近な人々等との会話を通して考えを明確にしたりする等、自分の考えを広げ深める学びである。

「深い学び」とは、生活の中から課題を設定し、その解決に向けて計画、実践、評価・改善と

いった一連の学習過程の中で、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、資質・能力を身に付ける学びである。

図 生活の営みに係る見方・考え方



※主として捉える見方や考え方については、大きい丸で示している。

取り上げる内容や題材構成等により、どのような見方や考え方を重視するかは異なる。

(出典 H28 教育課程部会家庭、技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめ)

この「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせるとは、例えば、栄養のバランスのよい食事をとることに関する題材では、「健康」の視点から生活を見つめる。そして自分の生活経験や学んだ知識を関連付けて考え、理解を深めることができるようにする。

① 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着

題材ごとに、発達段階に応じた基礎的・基本的な知識及び技能を明確にする。子供たちには、これまでの「知っていること」や生活経験と結び付けて、学習内容への必要感をもたせる。さらに実習や観察、調査、実験等の活動を通して実感を伴って理解できるよう工夫する。また、調理や製作等の手順の根拠について考えることにより、科学的な理解にもつなげる。例えば、みそ汁の調理で「なぜ材料をこの順番で入れるのだろう」ということを、実習を通して理解し他の材料や料理に応用できるようにしたり、ボタンの付け方で「ボタンと布の間に2～3回糸を巻くのはなぜだろう」と観察して理解させたりする。このように実践的・体験的な活動を通して、確かな知識及び技能の習得を図る。

また、製作見本、分解標本、試行用の教材、コンピュータ等を活用した教材・教具等、子供が活用できるように学習環境を整備する。また、子供の特性や生活体験を把握しチームティーチングや少人数指導を取り入れ学習形態を工夫する。ゲストティーチャーやボランティアとして地域の人材を活用する等指導体制を整え、個に応じた指導を充実する。

② 問題解決的な学習の工夫

題材全体を次の5段階の学習過程を設定して問題解決的な学習を進める。

とらえる	見通す	確かめる	振り返る	生かす
生活の 課題発見	解決方法の 検討と計画	課題解決に向けた 実践活動	実践活動の 評価・改善	家庭・地域 での実践
生活を見つめ、 生活の中から問題 を見だし、子供 自らが解決すべき 課題をもつ	生活に関わる知 識・技能を習得し、 解決の見通しに向 けての自分なりの計 画を立てる	課題解決に向けて 実践し、互いの考え を伝え合い、自らの 考えを広げ深める	実践した結 果を発表し、評 価・改善する	家庭や地域で 実践するととも に、新たな課題を 見付ける



③ 言語活動の充実

自らの考えを広げ深めるために、家族へのインタビューや身近な人々と会話を通して考える活動や、子供同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたりする活動を工夫する。

例えば「確かめる」過程では、試しの活動や実験・実習等を協働して行い、その結果をグループで話し合うことにより、自分の考えと友達の考えの共通点や相違点を見付け、より深く考える。その際グループの考えを言葉や図表等にまとめ、コンピュータや情報通信ネットワーク等を活用し、互いの考えを可視化して比較できるように工夫する。このような学習を通して身近な生活への理解が深まり、学んだことを生活に活用する能力を身に付けることができるようになる。と考える。

④ 家庭や地域との連携

子供たちが学習により、身に付けた知識及び技能を、実際の生活で生かすよう実践を積み重ねることが大切である。家族からの励ましや称賛は子供にとって大きな喜びや自信となり、家族のために役立っているという自分に気付くことができる。家庭科通信・実践カードのやりとり等を通じて、家庭に協力を依頼し、継続して実践できるようにする。

また、地域の人々の支援を受けながら、世代を超えた交流の機会を生かし、自分が協力できることを考え実践し、よりよい関わりがもてるような活動を工夫する。このような活動を通して、地域の人々と協力する喜びや思いやりの気持ちをもち、さらに、保護者や地域の人々に学んだことを伝えたり、発信したりして連携を図る。

(3) 指導に生かす評価の工夫

① 「指導と評価の計画」の作成

学習目標を実現するために、教師自身が題材の指導目標を明らかにすることにより、何をどのように評価するのかを明確にする。さらに、どの子も生き生きと主体的に課題を解決し、目標を達成することができるように、具体的な学習活動に即して評価場面や評価方法を明確にし、指導と評価の一体化が図れるように「指導と評価の計画」を作成する。

合わせて、一人一人にきめ細やかな指導や支援ができるように、学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図や具体的な手立てを明確にして計画を立てておく。

② 自分の成長を実感させる評価の工夫

子供たちの思考の流れや変容がわかるワークシートを工夫することで、一人一人の思考の深まりやつまずきを把握し、身に付けさせたい能力を適切に評価し、次の指導に生かしていく。

学習の振り返りの場面では、自己評価や相互評価を工夫し、できるようになったことを具体的に振り返ることで、「自分なりに解決できた」「生活に生かすことができた」と、自分にもできた達成感を味わわせ、自分の成長を実感できるように工夫する。さらに新たな課題を発見・改善させ、「もっとできるようになりたい」と主体的に学ぶ意欲を高めていく。